季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

春号

2002

3,4,5月

◉特集◉

イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー エドウィン・ダン

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

「ゴチ…？」

知の楽しみ

能生白山神社 …春の大祭と舞楽…

フリースペース

「とんちん館」感傷旅行

同じまちなのに

ミニ特集 知らない〝もの〟ばかり？

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

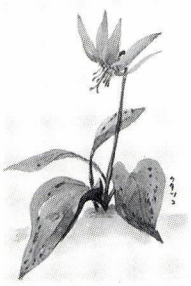
平成十三年三月

直江の津

第五号　春号
二〇〇二―三・四・五

特　集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン　4
巻頭エッセイ　「ゴチ……？」　米山康久　3
知の楽しみ　能生白山神社　春の大祭と舞楽　土田孝雄　16
フリースペース　「とんちん館」感傷旅行　濱田研吾　22
ミニ特集　同じまちなのに　知らない〝もの〟ばかり？　24
読書びと　『寺暮らし』　『その日暮らし』　森まゆみ著　27
見る目　木造大日如来坐像　28
姉妹都市上田　「聖ミカエル及諸天使教会」　15
投稿・五智観光旅行　21
東西海陸　26
読者から・バックナンバー　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より



斎京十四春・絵

「ゴチ……？」

米山康久

「坊や、どこから来た？」というような事を耳馴れない方言で訊かれて「五智」と、はにかみながら応えたのを、五歳頃のことなのに何故か鮮明に憶えている。

妙高の温泉旅館の、母と一緒の浴槽で、おそらく地の人でない小母さんたちに解るはずもない。「ゴチ……？」と言ったきり、無視されてしまった。幼い自分にしてみれば、確かに五智に住んでいた訳だから、間違いではないし、他に言い方を知らない。なのにこのいやな雰囲気は何だ、まるで叱られでもしたように、しょんぼりしてしまった。この事件以来、私の対人恐怖症が心に深く染み込んだといえなくもない。

その五智には、小学三年までいて、国分寺周辺の古い歴史や宗教的気配といった中で育った。遊ぶところと好奇心や冒険心をそそる対象に事欠くことはなかった。国分寺本堂右奥には、巨大な閻魔大王が「ウソをついたら、舌を抜くぞ」と、私を睨んで怖かった。古めかしい大日如来や釈迦如来などの五尊が並ぶ本堂は、ほの暗く陰鬱な空気が何やら不気味で近寄り難かったが、いたずら盛りのワル餓鬼どもには格好の遊び場であった。

信心深い門徒であった母方の祖父が、よく長岡から汽車で来ては、境内に立つ親鸞聖人の像に手を合わせ、南無阿弥陀仏と唱えていた。聖人を仰ぎ見る祖父の顔の穏やかさを今も忘れない。何を祈っていたかは知る由もないが……。

裏門を抜けるとすぐの所に「鏡ヶ池」があって、夏になるとギンヤンマの釣りに熱中した。まずメスをタモで捕り、竹竿の先に糸で結んでこれを囮に振り回すと、オスが寄ってきて絡みつく。この一瞬を逃さずタモを被せて一丁あがり……という実に理に叶った遊びで、飽きることなく日暮れまでやって、帰りが遅いとよく叱られた。

鏡ヶ池の名は、聖人が赦免となり常陸の国へ旅立つとき、別れを惜しむ人々のために、池にお姿を映して自らの坐像を彫られたので、この名が付いたと伝えられている。

そのお像が、わが家の近くの蓮光寺にも、片葉の葦の伝説書きなどと共に安置されている。真偽の程は別にして、その黒光りするお姿は見る者をして端座せしむるものがある。

かくして、私もそんな齢になったかと思うこの頃である。

（上越市在住）

是れ頸城地方の
文化的大工場の出現の
嚆矢であろう

イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー
エドウィン・ダン 特集

北海道開拓の父
北海道畜産の父
真駒内生みの親





取材「直江の津」編集部

是れ頸城地方の文化的大工場の出現の嚆矢であらう――と『直江津町史』をして言わしめたインターナショナル石油の生みの親。北海道では開拓の、畜産の父、真駒内生みの親と讃えられ、あるところでは駐日公使として活躍する人物。自ら、これらの経歴を分断して生きたかと思える〈エドウィン・ダン〉とはどんな人物だったのか？〈エドウィン・ダンを追い求めて〉のエッセイと合わせて、その人生の謎と、この地にインターがもたらしたものを解く手がかりを探ってみたい。

エドウィン・ダン（Edwin Dun）は一八四八年（嘉永一）、アメリカ合衆国オハイオ州スプリングフィールドに大牧場主の二男として生まれる。

ダンは長じて、マイアミ大学で法律を学び法律家になることを夢みていたが、自らの進路に対する疑問と長兄が土木技師になったため、一八歳であっさり大学を中退、父の牧場を手伝いながら牧畜を学んでいる。

そのダンに、一八七三年（明治六）大きな運命の転換の日が訪れることになる。

北海道開拓使

当時の日本は官民問わず、明治維新による近代化の原動力として、いわゆる「お雇い外国人」という政治・経済・文化・芸術などのあらゆる分野の専門家を高額の俸給で雇っていた。

そのなかの一人に、北海道開拓使最高顧問ホーレス・ケプロンがいる。彼はアメリカ農商務長官であったが、一八七一年に渡米した黒田清隆・森有礼がグラント大統領に要請して来日した人である。

北海道開拓使とは、北海道開拓のために設置された官庁のことで、その次官である黒田清隆は、北海道を欧米風の酪農によって開発しようと考え、ケプロンを招聘したのである。

一八七三年五月、家畜商アルバート・ケプロンは、父ホーレスの依頼で日本へ送るためのショートホーン牛（イギリス原産の優良肉牛）を買い付けにダン牧場を訪れ、八〇頭の牛を選び契約していった。

この牛をシカゴまで輸送したエドウィン・ダンに思いがけない話が待っていた。

これも、ホーレスから依頼されていたことなのだが、開拓使の農業指導者の欠員補充にダンを送り込みたいと言うのである。

結局ダンは、カナダから来る二〇頭の乳牛とサウスダウン種の羊一〇〇頭、ダン牧場の肉牛八〇頭をサンフランシスコまで輸送し、そのまま、一年契約ということで日本に渡ることになってしまった。

五月一六日、一四両編成の列車は、一路サンフランシスコを目ざしてシカゴを出発した。

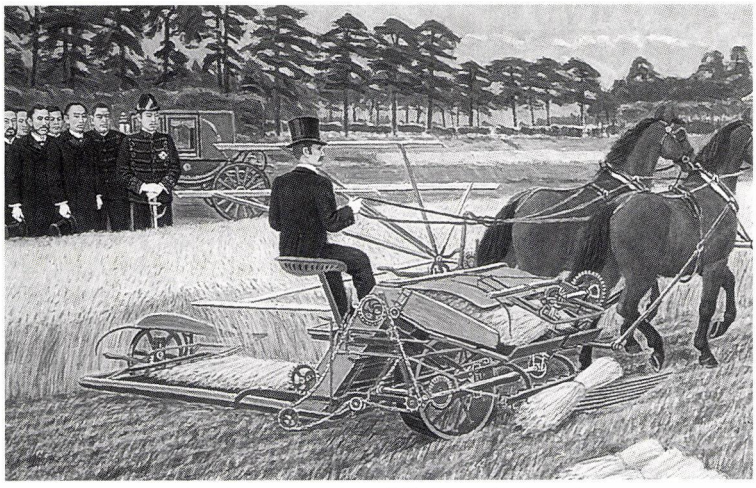
四年前に、ユニオン・パシフィックとセントラル・パシフィック鉄道が結ばれ、大陸横断鉄道が完成したばかりで、列車強盗などが横行する西部劇映画そのままの時代が残っていたころである。

列車は、四〇〇〇メートル級の山々が連なるロッキー山脈を越え、ネバダの砂漠をぬけ、シェラネバタ山脈を越える一九日間の旅を終えて、六月四日サンフランシスコに到着。

二〇〇頭の家畜（後に途中で出産があって増える）とダンは、五千トン級外輪船グレート・リパブリック号に乗り込み、六月一七日サンフランシスコを出航。

明治六年（一八七三）七月九日、二二日間の船旅を終え、その生涯を日本で終わることになる二五歳の青年、エドウィン・ダンの日本の第一歩が横浜に印された。

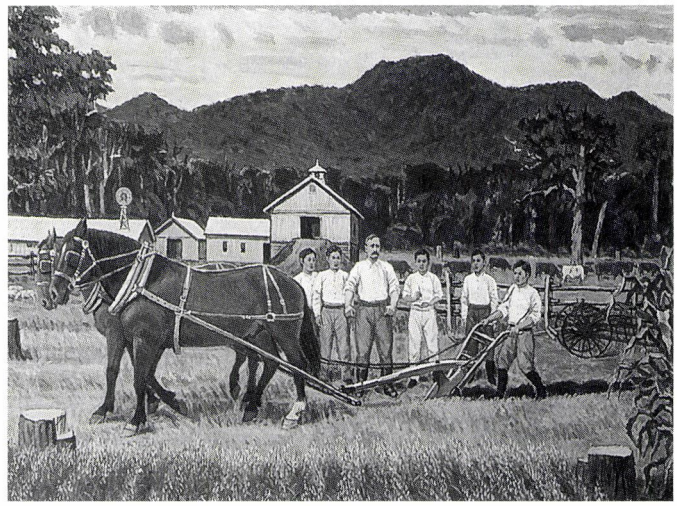
彼はさっそく農業指導者としての活動を始



明治天皇の前で正装で農機具を運転するダン
（エドウィン・ダン記念館絵はがき）



エドウィン・ダン記念館
札幌の真駒内公園（札幌オリンピック会場）に旧畜種場庁舎を移築してダンの業績をたたえるために建てられ、彼の銅像も建てられている。



農業指導するダン（エドウィン・ダン記念館絵はがき）

めるのだが、開拓使の農場は、現在の港区青山や渋谷区広尾にあり、北海道へ渡って開拓を始めた士族の子弟が上京して農業技術を学ぶというものであった。そこに設置されている、開拓使仮学校がダンの進言を入れて北海道に移り、後の札幌農学校になるのである。

着任早々、明治天皇の前で農業機械の作業をご覧に入れる機会があり、そのとき同席した西郷隆盛（従道？）から太刀を貰い、後々まで愛玩したという。

札幌農学校が開校する明治九年五月、ダンは妻ツル（ダンが改名したという）と札幌に向った（彼は前年、函館に近い七重の農場に出張中に出会った、旧斗南藩士増子庄吾の娘イワと結婚している）。以来、ダンは札幌農学校で農業指導者として、開拓使が廃される明治一五年までの六年間、数々の実績を残すことになる。

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」で有名なクラーク博士も一年で学校を去るなど、お雇い外国人の熱意や日本政府に対して少なからぬ不満を抱きつつも真駒内に一〇〇ヘクタールの牧場を開き、牧畜の飼育管理方法、馬の去勢術の指導、バター・チーズ、ハム・ソーセージの製法、ジャガイモの栽培などの指導に当り、また新冠（にいかっぷ）に馬の大牧場を開いて、日高地方を馬の一大産地にする礎を築いている。

明治一四年の明治天皇ご巡行では、彼の設計になる日本初の円形競馬場で競馬をご覧に入れている。娘ヘレンの伝記によればこの時、明治天皇がダンと数人で極秘の鱒釣の小旅行をしたという。

ダンは勲五等旭日章を授けられている。

駐日公使

北海道開拓使が廃止になった明治一五年一二月、東京に移ったダン一家を待っていたのは娘に対するいじめであった。安住の地を求め、娘を伴って一時帰国したダンは、アメリカ公使館第二書記官を命ぜられ、娘を残し妻の待つ日本へ再び渡ることになった。

明治二六年、思いだにしなかった第一〇代米駐日公使となり、翌二七年の日清戦争では、駐清国公使とともに戦争終結に向けた努力や講和条約締結の陰の力として働いている。

彼の働きぶりは、陸奥宗光と親密に意見交換している様子が宗光の『蹇蹇録（けんけんろく）』に詳しく書かれている。また『明治天皇紀』の明治二

八年六月二九日に、各国大使を招いての和平の祝賀の席上、天皇が「……特にダンに対しては、米国政府が戦争当時清国に在りし我が臣民を保護し、終始親密の友誼を表したるを、喜びたまふ旨を告げ、大統領に謝辞を伝えんことを嘱せらるる」とある。

このように公使として大きな功績を残しながらも、本国の政争によって明治三〇年七月二日、突然公使を解任される。

しかしそれは、上越地域に近代的な工業と異国の文化をもたらした「インター」への第一歩でもあった。

インントル社

「インントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー」（インターナショナル・オイルカンパニー）は明治三三年（一九〇〇）一一月一三日、一〇〇〇万円という巨額の資本金で、当時の石油業界に戦慄を与えて誕生した。

一一万坪の敷地に、日産四五〇キロリットル、東洋一といわれた直江津製油所を完成させ、翌三四年に日米両国人の握手を意味する「握手印」のマークで石油製品の販売を始めた。

明治初年の日本の石油製品は、ほとんどイギリス、アメリカの会社の輸入製品で、各社は日本市場で激しい競争をくり広げていた。明治三二年の石油関税の引き上げに対処するため、アメリカのスタンダード石油は、同社横浜支店のジュリアス・コップマン支配人を中心に資本金一〇万円の現地子会社太平石油を設立する。翌年これが「インントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー」に変身し、業界に激震を起こすことになるのである。

このインターナショナル石油会社・直江津支店の支配人として赴任して来た人物が、この地に文明開化をもたらした善良な異国人、エドウィン・ダンであることは、私たちのよく知るところである。

このダンがどのようにして石油業界に入っていったのであろうか。

話は遡るが、ダンの開拓使時代、同じく開拓使にいた地質学者スミス・ライマンは北海道および信越地方の石油調査を行い、越後の油脈について極めて有望であるとして報告し、それが越後における石油の本格的掘削のきっかけになったといわれている。

また、前述のようにダンは駐日公使となるが、罷免されて後も日本に止まるほどの親日家で、常日ごろ日本の発展には「外資導入による起業」しかないと考えており、先の石油開発を思い立ち、帰国して出資者を募ったが不調に終わり、コップマンを説いたところ、スタンダード本社の経営戦略と合致して事が進み会社設立となったのである。

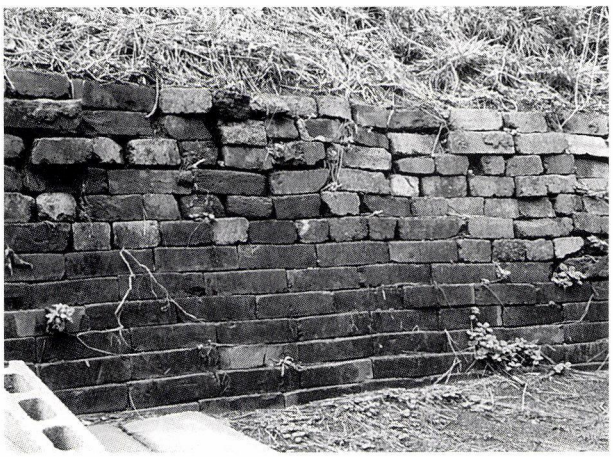
そして、長年日本に住んで日本人と結婚（当時、二人めの妻ヤマ）するなど、日本人の習慣や気質などを熟知し、またそれまでの経緯もあり、ダンを直江津支店の支配人にして経営に当らせようとしたものである。

工場建設は、当初柏崎を予定していたが、適地が無かったためと、牧村・板倉町周辺からの出油で、当時オイルラッシュといわれていたこと、直江津の港湾や明治二六年に碓氷トンネルの開通によって全通した信越線の交通アクセスの利点から、現信越化学を中心とする一一万坪の用地を太平石油が買収する形で進められた。

明治三二年、〝建設資材から事務用机イス、ホウキに至るまで〟満載したハドソン号が入港し、新潟税関が設けた直江津出張所は三万円もの関税を徴収したといわれている。

製油所の建設、赤レンガの異人館といわれた社宅の建設、柏崎・直江津間のパイプラインの敷設などの工事を終え、明治三三年一一月、太平石油会社を解散して、資本金一〇〇〇万円の「インントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー」が設立されたのである。

この時ダンは、札幌学校第一期卒業生で、ダンに指導を受けた伊藤隆一を総務部長として招いている。



インターの建物に使用されていたアメリカ製のレンガを利用して作られた土どめ。下部のきれいに積まれている部分。（市之町・柳沢孫六家）

■社名について

正式には「インターナショナルオイルカンパニー」だが、当時の業界では「インタル」と呼ばれていた。一方、地域の人たちは「インター」又は親会社の「スタンダード石油」を意識して「スタンダ」と呼んでいた。

■設立公告

明治33年12月4日付『横浜貿易新聞』に、横浜区裁判所は下記のとおり公告した。

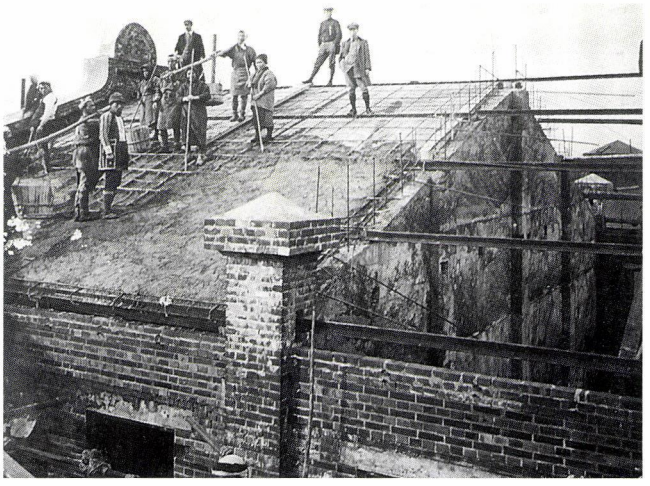
商　号　株式会社インタル、ナショナル、ヲイル、コムパニー
本　店　横浜市山下町八番地
支　店　新潟県中頸城郡直江津町大字至徳寺第百五十六番地※
設立年月日　明治三十三年十一月十三日
資本ノ総額　金一千万円
一株ノ金額　金百円
各株ニ付払込ミタル株金額　金二十五円

インターナショナル石油の株式引受状況（『東洋経済新報』明治33・12・5）

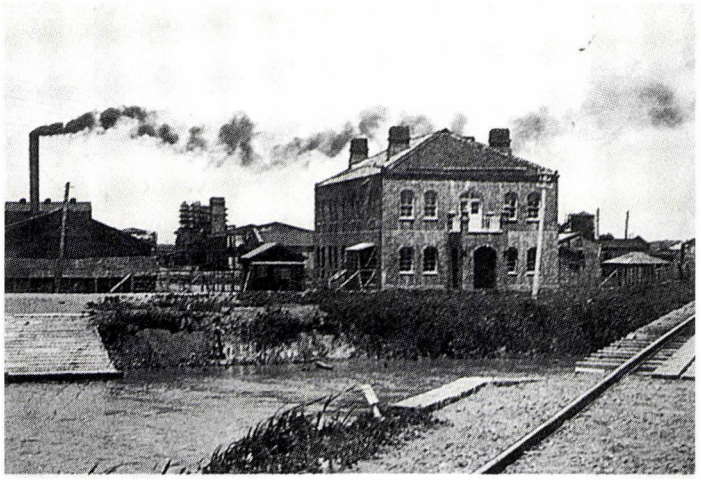
97、800株　ジュリアス・ウヰリアム・コブマン　米国人
50株　エドウヰン・ダン　米国人
50株　ジョン・ハムモント・ファーテヰグ　米国人
50株　隈本栄一郎
50株　ジョン・フレテリック・ラウダー　米国人
1、500株　大谷嘉兵衛
500株　馬越恭平

（『日本石油百年史』より）

※支店の所在地は直江津駅南、東雲町の諏訪神社周辺の「字宮ノ腰」に当り、土地更正図では「畑」となっており、新聞の誤記ではないかと思われる。



建築中の工場



赤レンガの本社屋　後に三井物産の事務所になった
右手は信越線保倉川鉄橋

当時、日本最大の石油会社、日本石油の資本が一二〇万円、宝田石油が六〇万円であったので、この資本額は業界を驚愕させるには充分であった。インター（以下この通称）は、当然、弱小業者の消滅または自社への吸収を予想していたが、石油産業に関心を持っていた大隈重信は「外資は各社を併呑し、日本の石油を壟断する」として、合併して対抗するよう呼びかけたため、インターの予想に反して、日石、宝田を中心とする体制を作ることになった。

このインターの進出は、後々語られる支配人ダンの残した数々のエピソードと人柄とは別に、業界に大変な脅威を与え、『北越石油地誌』は「是れ白人の経営に係る本邦唯一の石油会社なり――保倉川畔煙突林立白亜朱壁相鱗」とその壮観を伝えながら、激しくその進出の仕方を非難している。資本金わずか一〇万円の会社を設立しておいて、騙まし討ちのようにして一〇〇〇万円もの資本を投ずる会社に切り替えるやり方は、本社スタンダードの後ろ盾によるものであり、「外人の事業を輔ける者」は忠国の人では無いと断じている。

このインターがわずか八年で、突如として当時柏崎に本社のあった日本石油に売却されることになる。

明治四〇年五月九日、社長のコップマンとダンが何の前触れもなく内藤日石社長を訪れ「インターを売却したい」と告げ「スタンダード石油は、日本に富みを求め、また石油業界の発達に貢献しようと、インターナショナル石油を創業したが、今や日本の石油業界

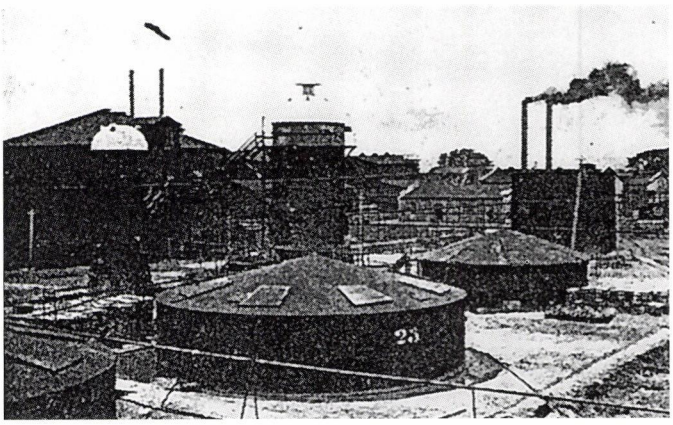
は技術・経営面で充分発達し、その刺激剤としての任務は終った。今後は、日本の石油業界の独占に向うより、設立の趣旨に従って撤退する。また、本来ならスタンダードの方針で機械設備を売却することはしないのだが、支配人ダンの〈日本の発展に寄与したい〉という当初の意を汲み、旧知の間柄であり信頼のおける内藤氏に、その設備一切を売却したい」と伝えた。

しかし、出油量に見合わない過剰な設備と多額な欠損が重なり、その進退について本国から技師のカーターを招き資源調査をさせているのが内情であった。結果は更に大規模な設備投資を行えば存続可能というものであったが、これ以上の投資はムリであると判断し撤退を決定しているのである。

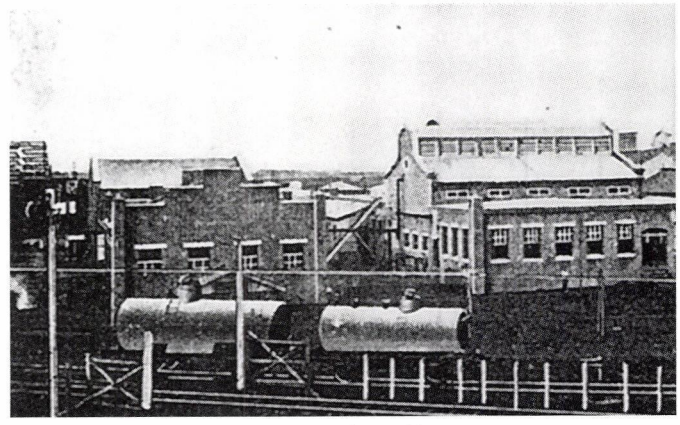
また、交渉一ヵ月という短期間で、八年の歳月と六五〇万円の巨資を投じたインターをわずか一七〇万円で売却した裏には、信じられないことであるが、社長でありスタンダード横浜支店の支配人であるコップマンが「欧州漫遊の旅を試みる」ため、その間の経営に穴を空けるわけにいかないという理由があった。

従業員も同時に日石に移ることになり、後日、内藤社長が「インターナショナル会社より引き移りたる社員諸君並びに工員の諸氏は、――余は諸君に対し新人の故をもって毫も遠慮することなく、充分に諸君の能力を発揮せられんことを望む」（『日本石油百年史』）と挨拶している。

その社員に売却が発表されたのが、五月二〇日、引き渡しが六月一日という短期間の事務処理であった。



原油タンクが並ぶ構内



赤レンガの工場

このため財産目録を作成する時間がなかったが、杉村楚人冠（そじんかん）が『越後記』で「正々堂々赤穂の城の引渡も斯くやとばかり」と賞賛する、私物以外はネジ一本、敷物一枚に至るまで社有の物は全て引き渡したという、支配人ダンの美談が生まれるのである。

このエピソードについて『日本石油史』が次のような「柏崎日報」の記事を載せている。概略すると「日石は簡単なものでも目録が欲しいと希望したところ、カーター技師が〝一吋（インチ）の鉄管たりとも、紛失さするが如き事なきは、このカーターの名に懸けて保証する〟と断言し、実際受け取ったあとで、予想を超える財産があるはずだと述べ、事実、各タンクの石油やその他を合せて一〇〇万円以上の財産が出てきた」また、これは「同社員の清廉潔白なるが為ならずとせず」として、受け取りの社長はじめ社員が感嘆したと伝えている。

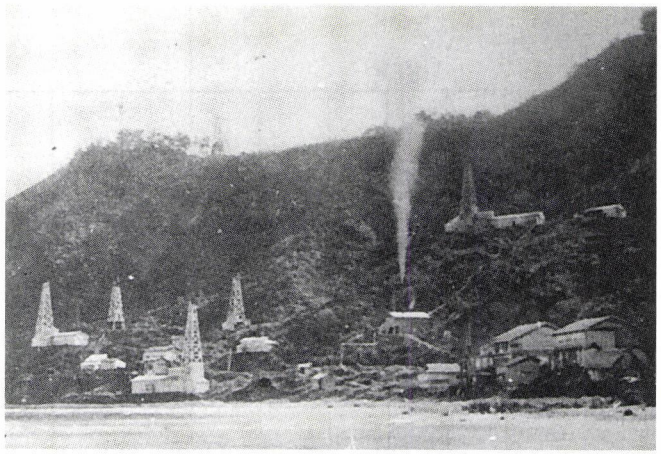
これらが「ダンは、短期間のうちに完全な財産目録を作成して全てを引き渡し、不正を働こうとする社員に〝立つ鳥あとを濁さず〟と言って諭した」などというエピソードに変化していくのは、彼がいかに高潔な人物で社員に慕われていたかを物語るものであろう。

かくして「吾国に比類なき大会社なるに、其背後にはスタンダードのあるあれば、人はインターの出現を以って、スタンダード吾石油界を併呑する第一歩なるべしと察し、其建築物の壮大にして、永久的なる、事業振りの大袈裟なるを見、嗟吁（そう）是れ神か、また魔かと絶叫するに至りたるが、この神の如く正体の分からぬ一大怪物が、今日吾日本人の手によりて経営せらるる一会社」（「柏崎日報」）に買収

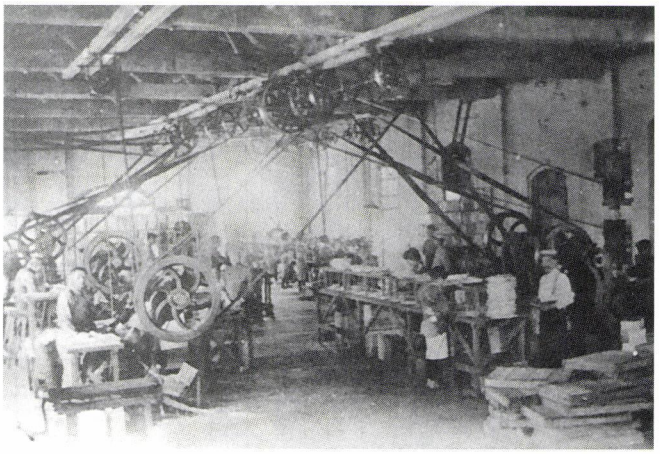
■インターの紛争

インター會社外國社員中に傲慢にして日本人を使役すること始ど牛馬の如くなるあり爲めに内外社員中兎角風波の絶へなきことは既報の如くなるが就中某課長は己れが怠慢より生ぜし職掌上の失態をも本邦人に負はせんとするの僻あるを以て感情上衝突を免れず本邦人武藤健前畠武市の二氏は遂に同社を退くこととなりしが尚ほ風波は収まらず重要なる位置を占むる本邦人某々數名も同課長を解任せざれば斷然袂を連ねて退社するの決心なりと云ふ（「新潟新聞」明治三十四年七月二十七日）

直江津なるインターナショナル會社が過般百名近くの製鑵職工を解雇したる爲め既に不隱の擧動あらんとしたる由は既報の如くなるが當時同會社にて解雇したるは東井又吉組三十名計りと清水清三郎組四十名計りとの二組なりしがインター會社にては彼等を解雇するに當り密かに東井組に向つて云へるには今斯く解雇するは便宜の爲めにて不日再び雇入るゝべければ東京に歸るは見合はし居れとの内約を爲し此頃に至りて内約通り右東井組を雇入れしかば之を聞きたる清水組は大に憤激し彼れに厚く我れに薄き會社の仕打は其意を得ず其分ならば我れにも心得ありと四十名計りの職工一團となりて二三日前より古城に屯集し日夜會社に對して爲すあらんとするの情況あるより會社殊に外國人は非常に恐怖し各自に短銃其他の兇器を持して警戒し尚ほ不安心と思ふものから右の東井組及び他の職工を集合して防禦隊を作りしため清水組にては益々憤激の度を高めアワヤ古城に一大血雨を漲らさんとするの情況頗る切迫せしより渡邊直江津警察署長は去廿六日同社に出張し同時に解雇したる一方を再び雇ふて一方を排斥するが如きは抑も失當の甚だしきものにて防禦隊を作るなどは愈々以て會社の失策と云はざる可らず直江津警察署の存する以上は速に防禦隊を解散し安心して業務を執られたしとの事に會社も安心して即日防禦隊を解きたるが渡邊署長は更らに善



インターに原油を供給した郷津油田（片田初造所有だった油田）



製缶工場
写真は日石に売却された後のものであるがインター時代と変わっていない

されたのである。

まちの人達に慕われながら直江津を去ったダンは、明治四三年三菱に迎えられ、長崎造船所で日本最初のサルベージ事業を起こし、沈船引上げ作業中に足にケガを負い、大正元年に三菱本社へ移っている。

晩年、二男でピアニストのジェームス・声楽家の道子夫妻の近くに住み、夫妻に連れられて映画を観に行き、懐かしい風景と母国の言葉をしゃべるトーキーに感涙（『明治の牧柵』）しながら晩年を過ごし、東京代々木の自宅で昭和六年五月一五日、八四年の生涯を閉じる。

ここまでに見えて来たものは、北海道では彼の石油事業についてほとんど知られていない。同様に我々も北海道で何をしたのかまったく無知であるということである。

また、北海道の大地で額に汗して農業の指導をし競馬に興ずるダンであり、インターナショナル石油で支配人として立ち働く彼の姿はどこにも見えてこないのである。

にもかかわらず、この直江津周辺にはダンの人柄やジェームスの思い出だけが一人歩きするように残っているのは何故なのか。

〈ダンを追い求める〉筆者も言っているように、彼の周辺資料には公使退任以降が、ぼんやりとした霧の中にあって何も見えてこないのである。

一体、インターが我々にもたらしたものは何だったのだろうか……。

後策として一に清水組を雇入るべしと勧告したるも彼等は恐ろしがりて雇入るゝことを好まざるより第二策として斷然東井組を解雇すべしと勧告したるも之又決心せず今に清水組は古城に屯集し居るといふ（「新潟新聞」明治三十四年七月二十八日）

（以上『新潟県史』資料編19）

参考資料

エドウィン・ダンの生涯　赤木駿介（「日本競馬を創った男」と改題・集英社文庫）

日本石油百年史　日本石油（株）社史編さん室　昭和六三年

日本石油史　日本石油(株)庶務課　大正三年

北越石油業発達史　明治四二年

越後記（「杉村楚人冠全集」第三巻）杉村楚人冠　昭和一二年

※ダンの自伝『日本における半世紀の回想』が入手不可能のため、公使解任までは、全面的に『エドウィン・ダンの生涯』とエドウィン・ダン記念館の資料に拠った。

エドウィン・ダンは、ツル夫人と死別して後、中平ヤマと再婚して四人の男子をもうけている。長男は帰化して団甫（だんぽ）と名乗り彦根市で生涯を終り、子孫の方もおられるという。三男・四男はアメリカのダンの実家に戻り、終戦直後、どちらかの人物が思い出のインターの跡地を訪ねたが、米国軍人の姿だったため警戒されて、帰ってしまった（柳沢孫六談）という話がある。

先妻の子ヘレンは五歳で渡米して叔母のもとで育ち、建築家と結婚、東洋の才女といわれたという。『あるお雇い外国人の生涯』という父の伝記を書いている。

私たちにとって最も忘れがたい人物は、次男のジェームス・ダンである。明治三七年四月、兄弟とともに直江津小学校に入学し「――入学記念トシテ望遠鏡一個寄贈セリ。――会社ト当校ノ交際ハ親密ニシテ、ローンテニス、ピンポン等ノ遊戯ヲ共ニシ」（直江津小学校沿革史）とあるように、同窓生に多くの思い出を残しているが、そればかりではなく、同校の校歌を作曲（昭和六年）していることである。校歌は、長年同校に尽力した一一代校長上原慶三の作詞で、当時としては珍しく校名が歌い込まれていない美しい詞とともに、今も歌い継がれている。



直江津小学校にあるベヒシュタインピアノ　譜面台が独得である。

もうひとつの功績として、同窓会が昭和三年の昭和天皇ご即位記念としてピアノを寄贈するにあたって、彼がベヒシュタインピアノを選定したことである。この募金の趣意書には当初「二台」を予定していたが、ジェームスの判断で、ベヒシュタイン一台にして購入したものと思われる。

ベヒシュタインは、ドイツのカール・ベヒシュタインが一八五六年に発売して以来、ベヒシュタイントーンと呼ばれ、ドビュッシーは「ベヒシュタインによってのみ真のピアノ音楽作品はつくられるであろう」とまで絶賛した世界最高のピアノである。このベヒシュタインM型は昭和三年当時、定価三千三百円（タイヨームジーク社調べ）であった。



ジェームス・ダン

ジェームス・ダン（壇治衛）は著名なピアニストとして、夫人のダン・道子は声楽家であり、初代歌のおばさんとして大変な人気の人であった。二人とも日本の西洋音楽界の草分けとして音楽史に残る人である。

同年一一月三〇日開催されたピアノ開きには、二人の演奏会が開かれ、クラッシックから童謡まで演奏された。

ピアノは長い間眠っていたが、平成六年修復されてコンサートが開かれ、以来、入学式、卒業式に美しい音色を響かせている。

陸奥宗光　＊　日本の名著35
明治天皇紀　8巻　宮内省臨時帝室編修局
新潟県史　近代編
明治の牧柵　ダン道子　武蔵野・ダン道子後援会
あるお雇い外国人の生涯　ヘレン・ダン・スミス
お雇い外国人　札幌市教育委員会
じょうえつ市の郷土史散歩　渡辺慶一・池田嘉一

資料協力
札幌市南区役所土木部
エドウィン・ダン記念館（財団法人・ダンと町村記念事業協会）
上越市立直江津小学校
柳沢孫六
高坂忠夫
上越市教育委員会

＊

参考資料中の〈ダンと町村記念事業協会〉の町村（まちむら）とは、真駒内牧牛場をダンから託された町村金彌・敬貴父子のことであり、ダンとともに北海道酪農の先駆者として顕彰されている人である。（北海道におけるダンに関する丁寧な資料をいただいた）

ダンの回想録の訳者、高橋新一郎北大教授はその原稿の入手について、原稿の持ち主とインターとの接点や翻訳に関わる興味深い展開をダンの小伝に紹介している。また、北海道におけるダンの事績を調査報告し、それらが契機になってダンの顕彰会が設けられた。

郷土史家渡辺慶一氏は常々「悪いダンがいる」ことを語っていたが、そのダンは「アムプローズ・シノ・ダン（DONN）」といい、函館領事の後、明治四年に長野石炭石油会社に雇われたが、石油にはまったく素人だったため会社に多大な損害をかけてしまった。このダンと混同されていたため、氏の発言となった。

掲載のダン記念館の絵はがきは一木万寿三画、銅像の作者は峯孝。





左右の写真は本社屋のほぼ同じ位置で撮影されたものであるが、左は創業当初の写真でダンは前列中央にいる。右は売却の時のものでダンは中段右から三人目にいる。この位置の違いは単なる偶然であろうか。

イントル拾遺抄

杉村楚人冠（広太郎）（明治五～昭和二〇）

「朝日新聞」記者。明治～昭和の大ジャーナリスト。文部省唱歌「牧場（まきば）の朝」の作詞者。

「越後記」は、明治四四年一月二〇日から四五日間、越後を取材して新聞に連載したものである。

このなかで、インターの廃墟となった社宅のありし日の様子を詳しく書いているが、荒れさびて見苦しく、「アラビアンナイト」中の化物屋敷だと言っている。その後、日石に売却された工場を見学している。上越における案内役の「高田新聞」記者岡倉谷人は岡倉天心の長男一雄である。

楚人冠は高田でレルヒからスキーの誘いを受け、また岩の原葡萄園も訪れている。

ジュリアス・コップマン

平凡社ライブラリー『日本アルプス』の解説に日本山岳会理事水野勉は、明治三五年、登山愛好者岡野金次郎が勤務先スタンダード石油の横浜事務所で、支配人ジェームス・ハッパー（ジュリアス・コップマン）がボーイに『日本アルプス』の原書を包装するように渡しているのが岡野の目に止まり、以来、岡野と著者ウェストンとの交友が始まって、日本山岳会創立へと発展し、本書の邦訳へと続くのであると、書いている。

なお、ウエストンは、同書で直江津海岸を美しい景色として残している。

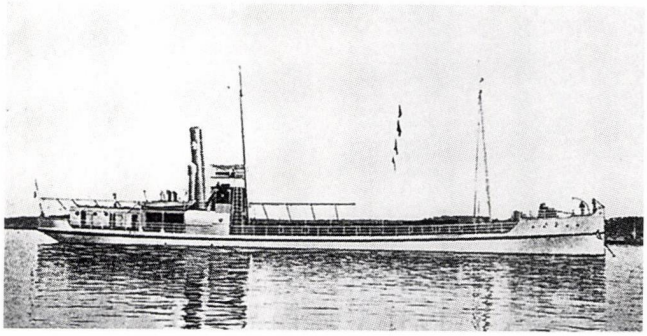
伊藤一隆

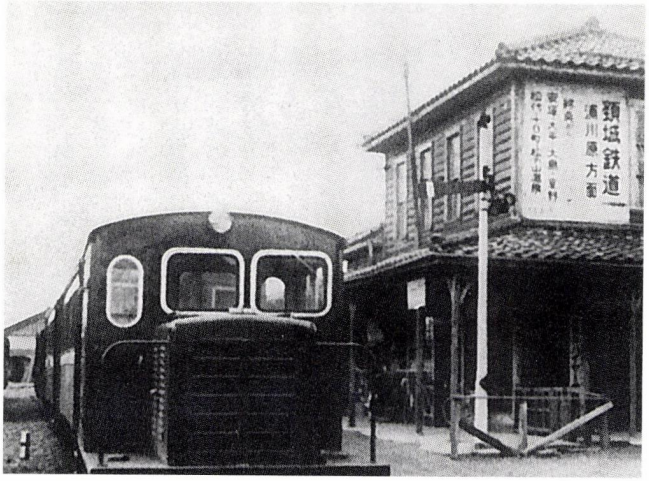
伊藤は札幌農学校で内村鑑三などとともにクラークの教えを受け、禁酒運動の先駆けとなった。鮭鱒の人工孵化場の開設、巾着網操業、鱈業の奨励など北海道水産業に貢献。アイヌ救済なども行う。インターから日石に移り『日本石油史』を表している。

エドウィン・ダン年表

1848年　嘉永 1　7月19日　米・オハイオ州スプリングフィールドに生まれる
1853年　嘉永 6　ペリー浦賀に来航
1859年　安政 6　安政の大獄
1860年　万延 1　桜田門外の変
1866年　慶応 2　大学中退
父の牧畜業を手伝う（18歳）
叔父のもとでサラブレッドの飼育と調教を学ぶ
また従兄弟と共同で牧畜を行う
1867年　慶応 3　大政奉還
坂本竜馬・中岡慎太郎暗殺
1869年　明治 2　北海道開拓使設置
1873年　明治 6　来日（25歳）
1875年　明治 8　増子ツルと結婚
1876年　明治 9　札幌農学校開校　農業指導者として赴任
1877年　明治 10　真駒内種畜場完成（現・エドウィン・ダン記念館）
西南戦争
1878年　明治 11　新冠牧場完成
ヘレン誕生
1882年　明治 15　開拓使廃止
1883年　明治 16　ヘレンを伴って帰国
1884年　明治 17　駐日米国公使館第二書記官となり再来日
1888年　明治 21　夫人ツル死去
1889年　明治 22　参事官となる
中平ヤマと再婚
1893年　明治 26　公使となる
碓氷トンネル開通で信越線全通
ネッド（団甫）誕生
1894年　明治 27　日清戦争
1895年　明治 28　日清講和に努力
1897年　明治 30　公使免職（49歳）
ジェームス誕生
北越鉄道（信越線）直江津（春日新田駅）・鉢崎間開通
1898年　明治 31　直江津駅現在地に
1900年　明治 33　インターナショナル石油会社・直江津製油所支配人（52歳）
ジョン誕生
1904年　明治 37　日露戦争
夫人ヤマ死去　黒井・本敬寺で葬儀（58歳）
1907年　明治 40　インターを日本石油会社に売却（61歳）
1910年　明治 43　三菱・長崎造船所でサルベージ事業を起す
作業中にケガ
1912年　大正 1　三菱本社へ移る
1923年　大正 12　日本石油会社　直江津製油所を撤退
1931年　昭和 6　5月15日　東京代々木の自宅で死去（84歳）

■年譜については、エドウィン・ダン記念館パンフレット及び『明治の牧柵』に拠って作成した。





上　日本石油に売却されたタンカー「虎丸」531トン
下　頸城鉄道（軽便）黒井駅に再利用されたインターの建物

●エドウィン・ダンを求めて

高橋寛彦

■求める人
たかはし・ひろひこ
ISOサポーティング・サービス代表

歴史は必然性と偶然性が織り成す綴れ織り…と書き始めてみたものの、まずはやや不純な動機が幸いしての一冊の本との出会いから話を進めたいと思う。

ずいぶん前のことなので正確な時は忘れてしまったが、所は東京・水道橋、後楽園の黄色いビルといえば、JRA日本競馬会の場外馬券売り場。一角にある競馬資料コーナーに時間を持て余して立ち寄り、何気なく本棚を眺めていると、ふと気になる背表紙が目にとまった。

タイトルは『エドウィン・ダンの生涯』、赤木駿介著とある。はて、エドウィン・ダン?…。同姓同名だろうか?

直江津に生まれ、直江津に育った人間としては、ダンの名を知らないのはもぐりに等しいと妙に確信めいたものをもって自認していた当人としては、迷わずその本を手に取ることになった。

パラパラとページをめくり、そのあらすじを追った時の感激は、今でも鮮やかに思いおこすことができる。

エドウィン・ダン。明治三十三年に「インターナショナルオイルカンパニー直江津石油精製工場」を創設し、以後七年間にわたって同工場支配人として直江津(当時は八千浦村)に在住した米国人である。今その地は信越化学直江津工場に姿を変えていると言った方が位置はわかりやすいかもしれないし、ダンの人物紹介としては、自分自身の年代も含めて、むしろ「ながめ尊き、妙高山の…」と始まる直江津小学校校歌の作曲者ジェームス・ダンの父親と紹介した方が親しみを覚えるような気がする。

しかし、そのエドウィン・ダンが、実は明治日本の近代化に有り余るほどの貢献をしたといわれる明治の「お雇い外国人」の一人であり、「青年よ、大志を抱け!」の名言で知られるクラークやケプロン等と一緒に、北海道の開拓に関わり、同地に畜産をはじめとする近代式農業を根付かせた人物であること。蛇足ながら日本で初めて近代競馬を披露したのもダンの仕事であったこと(だから、JRAの資料コーナーに彼の伝記小説が置かれていた)。さらに、米国の駐日公使として在任中、日清戦争の講和条約締結に大きな役割を果たした大人物であったことなどを知ったとなれば、それまでダンの名は知っているものの、その業績についてはほとんど認識がなかったという自分の無学さを恥じながらも、一方で矢も楯もたまらない気持ちになったとしても不思議ではない。

何故それほどの実績を持つダンが、うらぶれた日本海側の片田舎の町(と自分では当時の直江津を想像しているのだが…)にやってきたのだろうか?

ひょっとして、自分が今まで描いていた明治直江津のイメージは少し違っているのかもしれない。ダンにこだわってみるとその辺が見えて来るのではないか? そんな気持ちで、以来ダンに関する資料収集を始めてみた。

ところが、懸かってみるとこれが殊の外やっかいな作業だということを思い知らされた。赤木氏の著作でも、米国公使時代までは結構生き生きとドラマが描かれているのだが、直江津時代以降のことは読み飛ばす程度にしか触れられていないのだ。その原因は、赤木氏自身が述べているように、ダンの自叙伝『日本における半世紀の回想』高倉新一郎編/エドウィン顕彰会刊(残念ながらまだお目に懸れずにいる…)自体が、直江津時代以降の記述をほとんどしていないことにあるらしい。このことは、ダンと二人の日本人妻のことを扱った北海道在住の郷土史家・阿部三恵女史の『ダンとその妻ツル』(北海道新聞社刊)においても同様となっている。

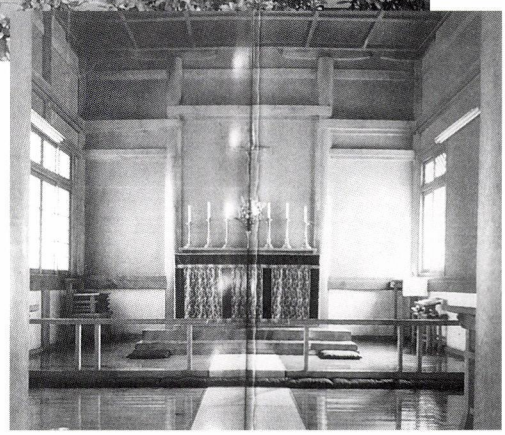
詳しさで言えば、故渡辺慶一さんの記述がせいぜいで、それ以上のものがなかなか見当たらないのだ。やはり、ダンにとって直江津時代はあまりいい思い出の地ではなかったのだろうか? いやいやもっと周りの文献も含めて当たってゆけば、どこかにあるはずだ。行きつ戻りつの思いを抱きながら、自分の中での葛藤が続いている。

多少唐突になるが、私の勝手な企てを明らかにするなら、自分で納得のいく資料が揃ったあかつきには、直江津時代のダンを主人公に小説めいたものを書いてみたいと思っている。テーマは、明治という時代、片田舎の町に、近代というものがどのようにして入り込んで来たのかという大層なものだ。話は当然、鉄道にも港にも及んでいくことになるはずだが、このテーマに関わる決して小さくないキーマンのひとりがエドウィン・ダンに違いないと思い込んでいる。

軍隊の誘致という極めて分かりやすい構図で近代を呼び込んだ隣の町とはまた違った、もう少し複層的な構図があるような気もするからこそ、文才さえあればおもしろいものが出来上がると確信しているのだが、どんなものだろうか?

●姉妹都市上田
「聖ミカエル及諸天使教会」





山と海、城下町という縁で長野県上田市とわが上越市は姉妹都市になっている。

上越人には、別所の北向観音へ初詣に行かないと「新しい年が始まらない」という人も多い。別所は温泉だけでなく、信州の鎌倉と呼ばれて寺院が多い。また最近では、塩田平を見下ろす位置に信濃デッサン館や戦没画学生の遺作を収集して胸を打つ無言館などの美術館ができ、そこを訪れる人も多い。

しかし、駅前にある人気の蕎麦屋もいいけれど、市街地を歩く人は少ないのではなかろうか。大通りから一歩中に入れば、北国街道の面影を残す町並みに、古い造り酒屋があったり、昔の店をそのまま利用した喫茶店とも食堂ともつかない店内に、幻の名器などと呼ばれるオーディオのアンプがあると、その傍らの最新のファクシミリさえも昭和初期のものかと錯覚するような雰囲気のある店があったりする。

駅前通りも変貌しつつあるが、数年前にできた池波正太郎の「真田太平記館」もいい。

その記念館の真裏に、ド肝を抜く建物があった。思わず「お寺さんが宗旨変え」したか、と尋ねてしまった。

植栽や保育園の遊具があり、あまりにも風景になじんでしまって、ほとんど見過ごしてしまう建物である。

「お寺に十字架が乗ってる！」の一言で、この教会を発見？　したのだが、どこから見ても日本のお寺である。

＊

フランスバロック様式で建てられた奈良国立博物館が、周辺の景観に添わないと酷評され、以来ホテルや公共建築物が寺社風になり、明治の終り頃に建った聖公会奈良教会もお寺さん風になってしまった。その弟分にあたるのが、昭和七年に建てられたこの教会である。どうして上田なのかよく分からないが、確かなことは昭和初年の上田はキリスト教が盛んであったらしいことである。

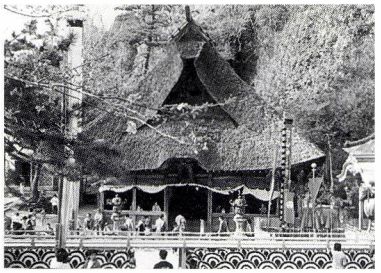
＊

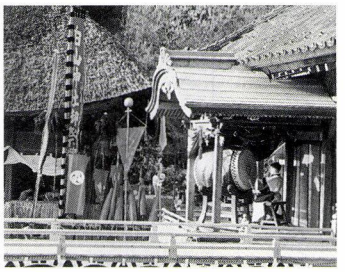
礼拝堂は祭壇に向かってうすべりが敷かれ、軸でも掛ければ床の間になりそうな祭壇である。異教の神というより日本の神の座と言った方がいいシンプルさと清潔さで、藍染めの座ぶとんが置かれた素朴な木の長イスに腰かけていると、本気で宗旨変えしようかと思えてくる。

後で分かったことだが、驚きのあまり尋ねた人が、かつて春日新田（直江津）の教会に長年おられた司祭さんだったのも仏（？）縁というべきか。

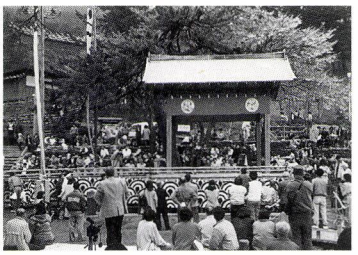
能生白山神社 春の大祭と舞楽

土田孝雄





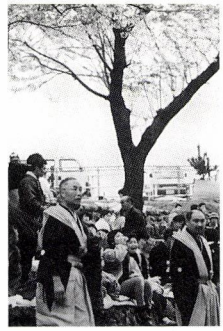
神人交歓

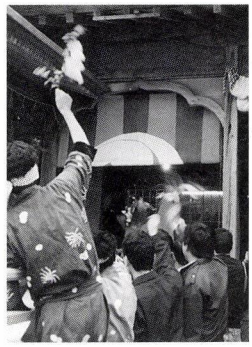


神遊びの里

神人共食







能生白山神社

怒涛逆巻日本海のうねりが少し弱まりかける頃、長く寒い越後の冬もそろそろ終りを迎える。日本海を目前にし、町のシンボルともいえる弁天島と、対岸の神宿す尾山にかかる朱ぬりの弁天橋が似合うまちが、能生町である。

この尾山の麓に能生町の総社、能生白山神社がある。拝殿は茅葺、どっしりとしたたたずまいにおもわず足が進む。そしてその北側に少し岩陰に寄りそうように美しい三間社流造り(ながれ)の本殿が室町時代の遺風を今に伝え、国の重要文化財に指定されている。奥の院・拝殿を守るように背後に広がる岩山(尾山)こそ、この社のご本体ともいうべき磐座(いわくら)で、社叢は常緑広葉樹のアカガシ・ツバキ・イヌグス・シロダモなどが覆い、そこにまた棲息北限の地といわれるヒメハル蝉が、国の天然記念物に指定されている。

祭りの日

四月二十四日。

祭りをつげるのぼり幡が町内のそこかしこに立てられ、浜風が潮の香りをのせて吹き抜けていく。

一番貝

二十四日午前零時、一声高く法螺貝が金剛院の石段で鳴る。

「一番貝」である。

二番貝が三時、そして三番貝が鳴るとき、社参への行列が出発する。祭礼の始まりである。

"七度半の使い"と獅子舞

白山神社祭礼の特徴の一つに「七度半の使い」という神事がある。能生谷三ヵ村(大王、大導寺、指塩(さっしお))の代表一名がこの役を受け持つ。白扇を持った使い人が、楽舎と拝殿を往復し、拝殿に安置されている神輿守護の社人にその折々に向上をのべ、お神輿のお出ましを請う。

一、先は今月御目出度く存じ奉る。随って皆皆只今参上致候旨

二、今日殊の外天気よろしく、御楽に大慶致候旨

と準備が相いととのえられたので、お神輿のお出まし下さいと七回同じ行為が繰り返され、八回目は口上がなく、ただ立って黙礼するだけで、社人はこれを受けて神輿の出発を告げるや、獅子が先陣をきって拝殿を一気にとび出していく。

獅子舞は若者を中心に二人一組で、獅子頭と尾部にもぐり、足を後ろにはね上げるようにし、また力強く大地を踏む。大きく足を下げおろし、身をかがめ、獅子頭を上下し、時に二、三メートル後もどりする激しい動きに、若者も三、四分で交代する。

獅子は御神嚮(ごしんきょう)の先導役で露払い役と同時に、地の霊を呼びさまし、悪霊鎮魂の役も努め、



社参の行列が境内に到着。五人の稚児と縁者達の記念撮影

西頸城には、糸魚川天津神社・能生白山神社・根知山寺に伝わる舞楽が国の無形重要文化財に指定されている

御神嚮　御神体の神輿をかつぎねり歩くこと

採物　祭事の時、神人（じにん）が手にとりもつ道具

舞楽奉納十二曲中の一曲に位置づけられてもいる。

獅子舞が先導する三基の神輿と行列がゆっくりと進み、笛と太鼓の音色が境内に響き、人々を悠久の祭礼のハレ舞台へと誘ってくれる。

なかでも花天冠をつけ、舞装束をつけた稚児五人は、長柄朱塗の大傘を従え、かしずく白丁の肩車に乗り、凛として立つ稚児は、まさしく神童の名にふさわしい。

お走り

白山神社の祭礼は実にうまく演出ができている。春の日の一日を神事のなかでそれぞれ大きな山場をつくり、観衆を興奮のるつぼへと誘ってくれる。

午前の部のクライマックスともいうべき「お走り」は御神嚮最後の儀式で、三基の神輿、五人の稚児を含んだ行列の一行が、社人の「ヤァー」という一声で、これまでの静止抑制の長い長い神事から解放され、猛烈な勢いで怒涛のごとくお旅所へ、竹矢来（たけやらい）へと殺到する。観衆の拍手、喝采、どよめきが神苑にうねりとなって広がっていくさまは、春の大祭ならではの感を呈するのである。

供神饌（御饌上げ）

三基の神輿が御旅所におさまると、拝殿からお神輿へのお供えもの（神饌）が運ばれる。この神饌の供え方も白山神社特有のやり方で、拝殿から御旅所の間に板橋をかけ、社人六人が三方にお供えものをのせ、長柄朱大傘に守られながら笛・太鼓・法螺貝の音に乗って三往復する。丁重でしかも雅な、海の幸・山の幸の数々が運ばれるさまは他所では見られない光景の一つである。祝詞があがり、その後社人、神主等が直会（なおらい）をやる。神人共食である。

舞楽

午前の「お走り」が終って一息つくころ、そろそろ神々への最高のおもてなしが始まろうとしている。

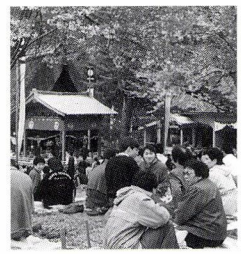
午後一時過ぎ、稚児二名で舞う振舞（えんぶ）で舞楽が始まる。二、候礼（そうらい）、三、童羅利（どうらり）、四、地久（ちきゅう）と稚児の舞が続く。

顔に薄化粧し、頭に花を飾られた大冠をつけ、きりりとあごに紐を結び、まっ白な足袋、そして振舞は鉾、童羅利は中啓、地久は扇の採物（とりもの）を手に持つ。

個々の舞振りや所作は紙数の関係で書けないので直接でご鑑賞いただくことにするが、私の好きな「児抜頭（ちごばとう）」に代表してもらい概説としたい。

児抜頭

稚児一人、花天冠を頭につけ、紫の狩衣、紫縮緬の差貫をつけ、採物に中啓をたずさえて舞う。顔に薄化粧し、眉毛は剃り落し、天冠から垂れさがる髪があやしげに乱れ、子どもとはいえ、威風堂々として笛と太鼓の音色に溶けこむように全体に静かに舞う。時折、





納蘇利（なそり）
別名双龍の舞といわれる二頭の龍が舞う

トンと床板を踏みならし拍子をとる。長い舞で、中途で立ったまま小休止。両手を紫の衣に包み、袖先を採物のごとく見たてて指先を動かす。呪術的仕種だろうか。稚児の舞の総仕上げ的な気迫に満ちた舞は、激しく鍛えあげられた神童の神仕えとしての誇りとも見える。花天冠の小菊のような風車が、浜から吹き上げる風に時折音もなく回る。

最後に再び中啓を取って左右に祓い、舞台から橋懸りへもどる。もっとも静かな動きの舞でありながら、観客からの拍手、歓声が大きい。稚児は吸いこまれるように楽舎の巴紋の垂幕の中へ消えていく。

〝陵王の舞〟

舞楽のなかでも最も人気のある陵王の舞は祭りの終焉を飾る舞として定評があり、大人の舞いである。

頭の上に龍神をのせた面をつける。異様な眼、垂れ下がったあご、ゆっくりと眼を観客に向ける。それらの所作に加えて無地の緋の衣、採物に日輪の扇を持つ。笛・太鼓の独特な音色が一段と重量感を加えてくる。

境内は少し薄暗くなり、電灯も点灯され始めると、いつのまにか境内には観客がいっぱいとなり、橋懸りに榊を持った獅子舞の若者



上　弓法楽（きゅうほうらく）
王朝絵巻から抜け出したような
愛らしい稚児４人が舞う
下　太平楽（たいへいらく）
世の乱れを鎮める太平の舞





桟敷で春の一日、神と酒食を共にする



児抜頭（ちごばとう）
花天冠が浜風に揺れ
神仕えの稚児の凛と
した気品が漂う





夕日を浴びての陵王の登場は威厳と神秘さを兼ね備え、境内は興奮の坩堝と化す。陵王の退場とともに宙に舞った神輿が還御すると、一瞬にして祭りが終わる。

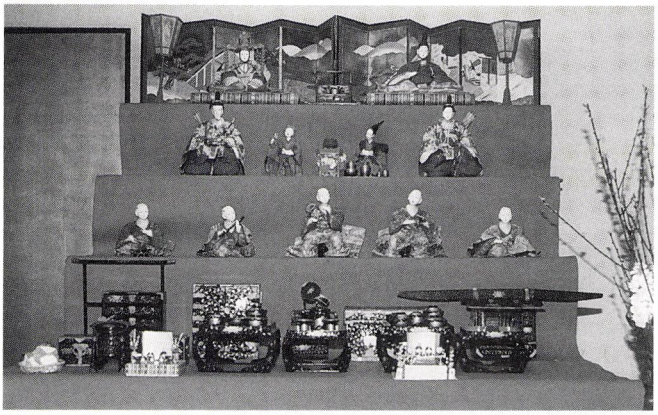


たちも集まって、やんやの声援である。直接手で陵王に触れてはならないので、近づく観衆を白丁が榊で押しもどし、また歓声があがる。橋懸りから長い長い時間をかけてようやく舞台に出る。海に沈む太陽を扇で招き寄せるという舞振りなど、長々と舞い続け、再び橋懸りへもどり始めると、いつの間にか橋懸りに二人の迎え人が待つ。陵王は満を持して、一瞬をついて待ち受ける二人に飛び寄ると、あっという間に陵王を抱えて楽屋に入る。同時に橋懸りの一部がとりはずされるや否や、待機していた神輿持ちの人たちが我先にとお旅所に殺到、三基の神輿を拝殿前に運び出し、ひともみ、ふたもみする。宙に舞う神輿に千余を越す観客は歓声をあげる。神輿のご還御は容易におさまらない。しばらく興奮のるつぼのなかに酔いしれていると、神輿は次々と拝殿へと入り、静寂な境内にもどっていく。

一日、神仕えした稚児たちは再び肩車に乗り神社をあとにし、街なかを通り帰途につく、「ご苦労さん」の声がまちゆく人たちからかけられながら——。

プロフィール
昭和十一年（一九三六）三条市本成寺に生まれる。立正大学、宗教社会学専攻。
県内で教職に就く。三九年に糸魚川高校に赴任し寺地遺跡・長者ケ原遺跡等の発掘に参加。
現職　糸魚川市・新井市文化財審議委員／糸魚川観光協会案内所非常勤職員／越後いといがわ塩の道を歩く会会長
主著　「翠の古代史」「神遊びの里」「奴奈川姫」「塩の道24号」

五智観光旅行



小川恵津子

冬号に別院の内陣の写真が載っているのを見て、国府別院のことは知っていても中がこんなにきれいだとは知りませんでした。

先日、光源寺で今年も享保雛が飾られたというニュースを新聞で見ましたので、冬とは思えない暖かい日に、母を連れて出かけました。

お雛さまは高田の方が菩提寺の光源寺に寄贈されたものだと知りなおさら身近に感じられました。今のものとは違って、のどかな優しい顔立ちと、立派な衣装で、よく傷が付かないで来たものだと感心しました。

光源寺の本堂は、阿弥陀如来でなく親鸞聖人の掛け軸が掛かっており、お寺のパンフレットにも光源寺独特のものだと書いてありました。聖人の流人札や恵信尼公と聖人が並んで描かれている名号の軸などが無造作に飾ってあるのにもびっくりでした。

境内には高浜虚子の句碑があったり、たぶん秋になったら黄葉がきれいだろうと思われるイチョウの大木があり、秋にも来てみようと思いました。

いよいよ別院です。本堂は格子のように四角くなった天井のひと桝ひと桝に花や鳥の絵が描かれ、内陣は柱のほか、何から何まですべて極彩色です。市内にもこんなきれいなお寺があるなんて知りませんでした。

ここでも、阿弥陀さまがまん中でなくて、親鸞聖人と阿弥陀さまの像が並んでいます。やはり聖人の旧跡だからでしょうか。

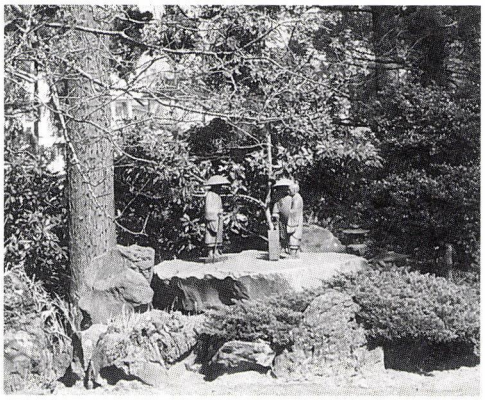
光源寺の焼香台の脇にあった「港まち、直江津　さんぽ」（編・註　上越市観光課発行）というガイドマップをもらったので、少々寒かったのですが、居多神社、親鸞上陸の地、国分寺を廻ってきました。

別院の裏に大きな池があるのも知りませんでした。暖かくなったら、こんどは愛宕神社や白山神社、十念寺にも行こうと思っています。

帰りの車中、母が「なんだか観光旅行したみたいだね」と言いましたが、自然豊かな山を背景にお寺や神社があって、古い歴史を感じさせられました。大げさに言えば、飛鳥の山裾に広がる風景に通じるような気がしました。また、すぐそばに海もあるし、よその土地だったら観光地化していてもいいような気がしました。

私の住む高田の寺町のお寺さんとは全く違うお寺の雰囲気を感じた半日でした。

（タイトルは編集部でつけさせていただきました。）



●フリースペース

「とんちン館」感傷旅行

濱田研吾

ドイツ文学者の池内紀氏が綴った、「柏崎感傷旅行」というエッセイがある。(注1)「柏崎感傷旅行」といっても、良寛の足跡や、米山のお薬師詣や、えんま堂の縁日が目的ではなく、青海川の高台に建つ「石黒旦那・ユーモアコレクション・とんちン館」を訪ねるための《感傷旅行》であった。エッセイは、「とんちン館」訪問記と、池内氏が少年時代に親しんだラジオ番組「とんち教室」(注2)との思い出がオーバーラップするかたちでまとめられている。

《石黒旦那》と呼び親しまれた石黒敬七(一八九七~一九七四)の本職は柔道家だが、『文藝春秋』に常連として名を連ねるなど、戦後のマスコミを彩った稀代のユーモリストでもあった。中でも粋人・通人が言葉遊びを競い、敬七もレギュラー出演した「とんち教室」は、団塊の世代より上の方には懐かしい響きがあることと思われる。

「わたくしはとんち教室の青木先生です。出席をとります。石黒敬七さん、『はぁ~い』。玉川一郎さん、『はいっ!』。西崎緑さん、『は~い』。桂三木助さん、『はい』。長崎抜天さん、『はい』。春風亭柳橋さん、『ぐぁい』。以上のみなさんです」

「とんち教室」は修学旅行と称して地方で公開録音されていたし(第一回は敬七の故郷柏崎で行われた)、テレビへの出演も多かったので、トレードマークの黒ぶち眼鏡とパイプは、広く一般的に知られていたという。

*

越後路が生んだ稀代のユーモリストは、明治三十年(一八九七)、刈羽郡比角村(現・柏崎市四谷二丁目)に生まれた。七人兄弟の末っ子だったので《敬七》とついたそうだが、お産があまりにも軽かったので、「裏の茄子畑で生まれた」と、まことしやかに言い伝えられている。

二十七歳のとき、柔道家として留学したパリで蚤の市と出会い、渾身のコレクションはここに始まった。初の著書のタイトルも『蚤の市』だったが、「蚤の市」という言葉を日本に定着させたのは、敬七だという説もあるらしい。

こうして長年にわたって収集されたコレクションは、昭和五十八年(一九八三)、「とんちン館」(別名「柏崎農林漁業資料館」)として一般公開されることとなる。カメラ、幕末期の写真、時計、喫煙具、遠眼鏡を中心に、蚤の市での掘り出し物や、知己から無理やり貰った骨董、ガラクタの類いなど、収蔵品はざっと二万数千点にのぼるときく。

本誌冬号に寄せた一文で「とんちン館」について触れたところ、「利用者が減少し、二

■はまだけんご
一九七四年大阪生まれ/現在東京都内編集プロダクション(株・同文社)勤務/昭和の芸能・文化人を中心とした、放送・マスコミ史を研究

注1・「地球の上に朝がくる・懐かしの演芸館」所載・河出書房新社（一九八七）
注2・昭和二四年（一九四九）～四三年（一九六八）NHK第一で放送

石黒敬七が「わかなみ」のために書いたコピー。
「わかなみ」は特許を取得して、長くわかなみ」とは「こんぶ茶」そのものの時代が続いた。



月に閉館するそうです」という、悲しいご教示をいただいた。私もリアルタイムで接した世代ではないが、石黒敬七の名は今や馴染みのある名ではない。閉館理由も納得はできるものの、今冬の越後路を避けては、もはや訪ねる機会を逸してしまう。大雪ふきすさむ一月のある日、さっそく訪ねていった。「柏崎感傷旅行」ならぬ、「『とんちん館』感傷旅行」である。

地図で見当をつけてJR青海川駅で下車したが、荒海にのみ込まれそうな《無人駅の傑作》である。人影ひとつなく、案内板ひとつない。迷子になりつつ、なんとか「とんちん館」までたどり着いたが、客足は悪天候も重なってさっぱりだった。「柏崎コレクションロード」なる名目がついているが、意識しているのはマイカーでやってくる家族連れであって、無人駅から歩く偏屈者ではないらしい。

閉館を前にして、展示品を紹介するまでもないが、《……らしい》《……といわれる》《……であろう》《……ときく》《……とのこと》《……？》などといった頼りない解説が、コレクションそのものを物語っているようで楽しい。気のてらわない品々は、昨今の蚤の市・骨董市ブームとも相通じるし、骨董ファンの聖地になってもおかしくはない。

コレクションに大金をかけず、無類の貰い上手だったという敬七の収集法にも愛着がわく。エスプリのきいた解説を読むと、渡辺紳一郎、サトウハチロー、高田保、徳川夢声、宮田重雄、式場隆三郎、高野二三男といった、戦後文化人の名が次々と目に入るが、コレクションがここまで膨れ上がった理由の一つに、こうした《ゆる～い》人脈があったことは知っておきたい。敬七と時同じくして活躍したユーモリストたちの名が、こうして日本海を望む高台に、怪しげなコレクションとともに息づいている。名前を耳にする機会の失われている人たちだけに、別の意味で閉館が惜しまれてならない。

＊

館内をひととおり見学したのち、受付の女性に「とんちん館」の行く末について尋ねた。閉館後はリニューアルされ、ゴジラやウルトラマンといった、懐かしのヒーローが集う施設に生まれ変わる。一方で膨大なコレクションの品々は、館長の石黒敬章氏（石黒敬七ご子息）に返されるときく。なんらかの方法で一般公開のめどが立てば、と願うのみである。

帰りは柏崎までバスで戻ろうと考えたが、なぜか《無人駅の傑作》まで歩きたい心持ちがした。無情にも下り列車は目の前でトンネルへと消えてゆく……。《感傷旅行》をしめくくるには、なんともお誂え向きな光景であった。（一部敬称略）

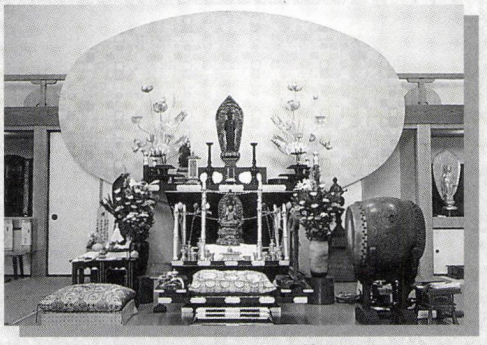
同じまちなのに知らない〝もの〟ばかり？



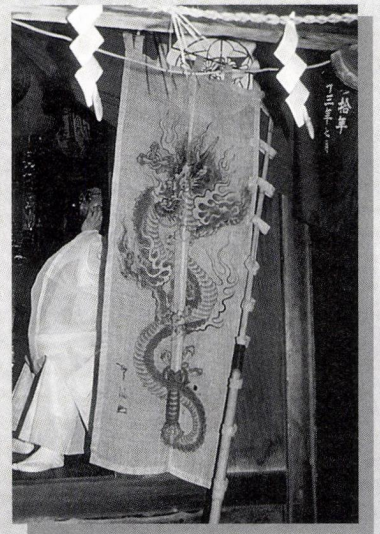
なぜか寺町妙国寺にある山岡太夫の墓



祇園神輿の初日のお旅所、陀羅尼八幡にある石碑



これも、なぜか寺町にある義経ゆかりの華園寺





祇園の神輿が高田に着いた同じ日、「なんぼいさん」という祭りが行われている。謙信公拝領の幟を持って妙高へ登る。春日神社で報告の神事。

ミニ特集

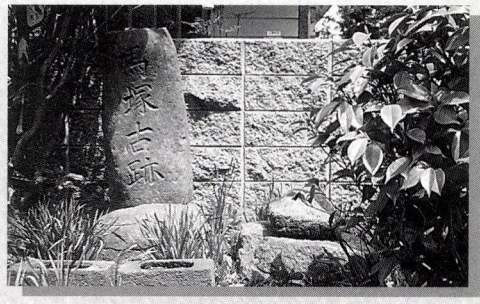
高田のまち マニアックが歩いた



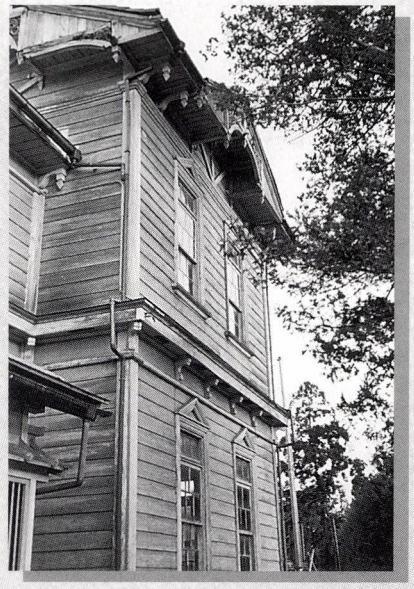
「赤い蝋燭と人魚」のモデルとなったといわれているローソクの看板

年代ものの看板を大切にする文具屋

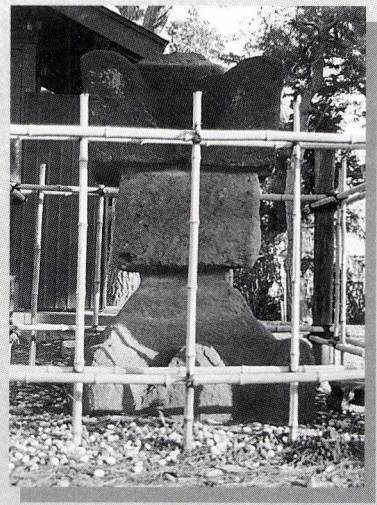




謙信公の愛馬を葬る「馬塚稲荷」



市内に残る唯一の民間木造洋館

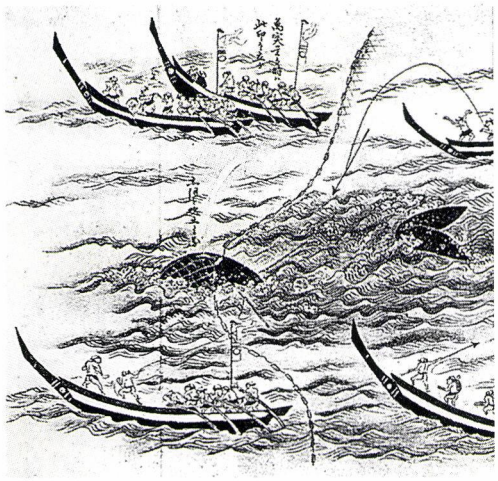


巴御前のお墓・三丁史稲荷



今も軍都の昔を
物語るＪＲ機器

海西東陸



上下浜小学校が〈鯨学校〉と呼ばれているのは、明治四三年に一一トンもある鯨があがって、これを切り分けて近隣の村々に売り歩き、その収益で学校を再建したからだ、ということをたまたま思い出していたら、あちこちで鯨が集団で砂浜に打ち上げられるという事件が続いている。

原因は解明されていないらしいが、海の環境破壊が進んで集団のリーダーが変調をきたし、進路を誤ってしまったという説がある。鯨は集団で行動するので、リーダーがいるらしい。また捕鯨禁止の影響で鯨が増えすぎて、種の保存のため一部が集団自殺したのだという説もある。

さて、その鯨を救出するだの死骸を埋めて骨格標本を作るなどと言っているニュースを見ていると、どうも釈然としない。

筆者の世代の学校給食は、脱脂粉乳と鯨肉が定番の時代だったし、夏バテには鯨汁と決まっていた。ところが鯨汁は夏のものとばかり思っていたら、鯨は冬の季語で、鍋物にしたり正月の汁物という地方のほうが多いのには驚いた。そして味噌汁仕立の鯨汁は、このあたり独特のものらしい。

その昔、捕鯨オリンピックというのがあって、ラジオの子供ニュースで「今年も日本が一位です」というアナウンサーの声が記憶に残っている。

以上のようなことを考えながらテレビを見ていて、何で「美味しくいただいて成仏して」もらわないのかと呟いてしまった。一方では、近頃ちょっと可哀そうだと思ってしまうのは何故なのだろうか。

この話を友人にしたら、あの抹香鯨を見ただけで目方や長さを実感できなくなっている、そのほうが問題だ、と言った。

いつから私たちは、鯨を食べることを放棄するだけでなく可哀そうだとか、それを野蛮だとか言い出したのだろうか。

鯨を激減させたのは、イヌイットやわれわれ日本人ではなく欧米諸国がやった乱獲の結果ではないのかと、そこまで目くじらを立てるつもりはないが、資源保護ではなく、鯨の知能が高いだの仲間同士で会話があるだのという感情論が出てくるのは如何なものか。

ところが、われわれはそのあたりの感情論にめっぽう弱く、若者言葉で言えば「くじらって、けっこうかわいいみたいだしー、かわいそー」ということになってしまう。

食文化などと高邁なお題目を掲げるまでもなく、IWCやヨーロッパの環境保護団体は、何で「ひとの食い物」にくちばしを入れてくるのだろうか。

日本人は、鯨を海からの賜物として一頭で四里四方が潤うなどと、ありがたく食してきた歴史を持っている。だから堂々と反論して、堂々と食べればいいと思うのだが、どうも弱い。横たわっている鯨を見ていると胸のあたりがキュンとしてくる。日本じゅうが外圧の言いなりになって、どんどん勝手に自己規制して、一生懸命それに合わせている節がありはしないか。韓国や中国で「愛犬家」というのは別の意味らしいが、これを動物虐待と言って抗議したら、両国の愛犬家は絶対に許さないだろう。

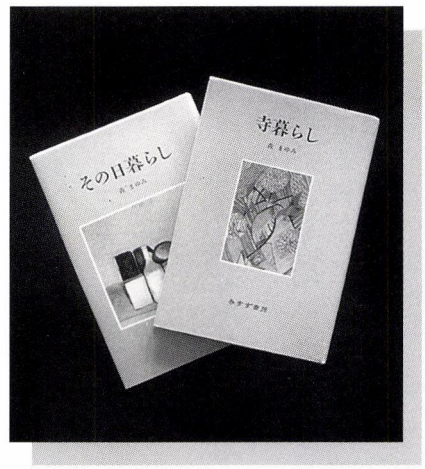
コーランに、イスラームは
「聖なる日には、必ず鯨を食すべし」
と書かれていたらどうだろうか。

もしこれを「野蛮」などといったら、あの「九月一一日」が、世界のどこかで再び起きないという保証はない。

私たちは西と東の狭間で西に傾いて、素朴なふるさとの心を失ってきたような気がするのだが……。

（涎）

■読書びと



寺暮らし
その日暮らし

森まゆみ著

みすず書房刊
（一八〇〇円・一九〇〇円）

一九八四年九月、A5判、本文僅か八頁ながら『地域雑誌　谷中・根津・千駄木』となのる小冊子が誕生した。長すぎる名を地元の人々はいつしか〈谷根千（やねせん）〉と呼ぶ。編輯発行は山崎範子、森まゆみ、仰木ひろみの三人の若き母親達であった。発刊の口上に「江戸の面影を残す寺町・谷中、かつては遊郭も栄えた職人の町・根津、鷗外・漱石ゆかりの千駄木……懐古趣味ではなく、古き良いものを生かしながら、暮らすのが楽しい、生きのいい町として発展するのに少しでもお役に立てたら」とあるように、歴史を掘り起こし、お祭りを盛りたて、建物と自然をまもる活動を続ける。

一部百円、初刷千冊の『谷根千』は、季刊・定期発行と自前原稿を死守し現在六十八号を数え、本文四十八頁（定価は五百円）数万人の読者に愛される存在となった。

毎号の特集も、町の文化財や文人の足跡紹介だけでなく「お肉屋さんへの応援歌」と題して牛肉騒動への問題提起があったりもする。市井の人々の記憶を大切に、地の縁・人の縁が築き上げてきた地域の商業活動とともに歩む仕事。

経済的自立にこだわり、のれん会方式を排して〈身銭を切ってでも買いたくなる雑誌〉を希求する姿勢が原点となった。

森まゆみは一九五四年文京区動坂に町医者の娘として生まれ、早稲田の政経・東大新聞研に学ぶ。出版社勤務、結婚、出産、フリー編輯者、そして『谷根千』創刊、という二十代の軌跡を経て婚を解いた。その後もさまざまな運動に係わりながら、在野と東京ローカルを貫く。聞き書きを中心にした明治大正の女性達やアナーキスト群像の発掘と、多くの書評活動を展開し、一葉や鷗外をやさしい眼差しで甦らせた評伝（『かしこ一葉』筑摩書房・『鷗外の坂』新潮社）などの良質な仕事を、地域雑誌と三人の子育ての修羅場から発信しつづける。

硬質な雑誌『みすず』の連載エッセイを纏めた『寺暮らし』は一九九七年に上梓された。

牛乳を買いに出た町でフラフラと入った不動産屋のすすめで、寺の境内にある3DKの賃貸しに引っ越すことになる森。花が咲き鳥の来る、墓地と緑に囲まれた静かなすまいに魅せられ、私ここに住みたい……と即決するまでの心理が、切なくそして愛おしい。

十八年ぶりに自分の机を得て感慨にふける彼女が書き紡ぐさまざまな町の貌。磯崎新や、藤森照信の発言、同潤会代官山アパートの最後など建物や住まいに関わる文章が多い。

境内の四季の移ろいを背景に、出合い別れる人々への素直な感情のスケッチが、日常の苛立ちと癒しをくもりなく描きだしている。

続編の『その日暮らし』では、成長する姉弟と共に棲む生活を見据えて、バブル期にマンションの乱開発を批判した森が、その集合住宅を購入して移り住む日々を綴る。「良かったな」と一息おいて、「それは思想に対する裏切りだな」と言った父親のことばがほろ苦い。

私淑していた須賀敦子（哀切窮まりない追悼の文章も収められる）が生前つよく勧めた外国旅行の時をようやく手にする森。インド、イタリア、モンゴル、チェコ……様々な土地での心象風景を織り混ぜて編まれたこの一冊。

そして、外から帰って来たときに見つめ直す地域とこの国の在りようへの赤裸々な視点こそ、簡潔な〈暮らしの自立〉を支える精神の銃眼なのだと強く感ずる。

森は雑誌の編輯後記を、アフガン国境での中村哲医師の活動を引き「同じく十八年、私たちは谷根千で井戸を掘っていた。浮足立つことなく日常の思想を鍛えなければならない。」と結ぶ。童女の面影を持つこの聞き書きの名手と坂の町に住む小さな家族の暮らしに幸在れ。

（芯）

見る 目（みるめ）

木造大日如来坐像

五智国分寺の奥院とされる岩殿山大日堂に平安後期（十二世紀）の大日如来像が伝来しています。本像は、明治三九年に国宝指定（昭和二五年、現行の文化財保護法によって重要文化財）された新潟県を代表する文化財としてつとに知られています。

大日如来は、密教において最高の絶対的な存在とされ、またほかの如来とは違って菩薩の姿で表されます。この像のように、胸前で左手の人差し指を右手の掌で覆う智拳印（ちけんいん）を結んで坐る姿は、金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）の大日如来を示します。そして、この特徴は真言宗の本尊であることを示しています。

本像は、カヤの一材から頭と体の幹部をつくり、膝の前の部分と両手は別につくって寄せています。干割れを防ぐため、背面は後頭部から腰まで内刳りを施します。眉間には水晶製の白毫を入れ、頭上に宝冠をのせ、胸飾りや臂釧（ひせん）・腕釧（わんせん）といった装身具を身にまといます。像の表面は、造立時の仕上げを失っていますが、当初は全身に金箔を押した漆箔像だったようです。

穏やかな表情や細くしまった腰、横に広く張り出した薄い膝などに平安後期の作風がうかがえます。しかし、いつ、だれが作ったのか。制作地は中央（京）なのか。それとも中央の仏師がこの地で作ったのか。最初から岩殿山に伝来したのか。他から移入されたのか。本像をめぐる中世以前の資料は何も残っておらず、いわば謎だらけの仏像です。

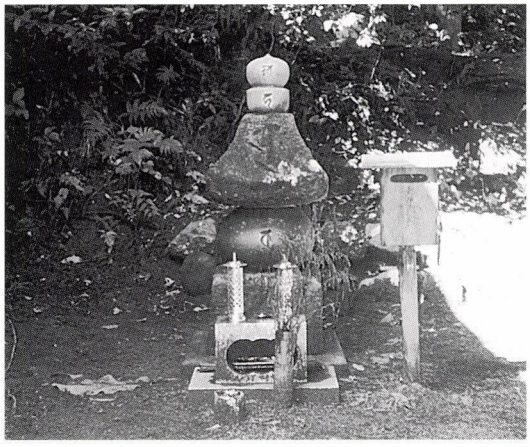
ただ、岩殿山が古くから信仰の地であったことはまちがいなく、本像と同時代の経筒の外容器（珠洲焼製）や鏡・土器などが発掘されていることから、もとからここにあったと考える方が自然でしょう。

ところで、意外と知られていませんが、本像を安置した大日堂の横に並んで「上杉謙信墓所」と伝えられる五輪塔が建っています。国分寺には、元和五年（一六一九）に当時の高田藩主松平忠昌の家老永見志摩守が岩殿山内の謙信墓所へ十二石を寄進するとともに、管理を任せていた妙徳院へ供養を命じている文書が残っています。墓の真偽はさておき、上杉家の移封から二一年を経た当時、高田領内では謙信の墓が岩殿山にあることが、なかば常識となっていたようです。しかし、謙信は米沢市の上杉家廟所に祀られていることは、ご存知のことでしょう。米沢藩の正史『上杉家年譜』でも、春日山城で亡くなった謙信の遺骸は、転封とともに米沢へ移動したことになっています。では、岩殿山に謙信の墓所があるのはなぜでしょう。

宗教家としての一面を覗かせる謙信は、とりわけ真言宗に深く帰依していたことがわかっています。米沢に伝わる両界曼荼羅をはじめ、数々の遺品から謙信の信仰をうかがうことができます。謙信は、永禄五年（一五六二）に五智国分寺を真言宗寺院として再興したといわれています。落慶法要のようすを『上杉家年譜』は「供養ノ規式経営ノ作法、美尽セリ、勤番ノ軍士、参詣ノ貴賤、前庭ニ

右　大日如来坐像
左上　岩殿山の遠望
左下　上杉謙信墓所（岩殿山）







群衆ス、誠ニ隣国ヲ驚スハカリナリ」と伝えています。前年に、鶴岡八幡宮で上杉の名跡と関東管領職を譲られた謙信の、まさしく地元での披露が、国分寺の再興と落慶にあわせたセレモニーではなかったかと想像しています。関東管領職にはようやく就いたものの、越後守護職までは継承できなかった謙信にとって、国分寺の再興は、自身が越後国守であることを内外に知らしめるための格好なパフォーマンスではなかったでしょうか。そして、再興にあわせて、もともと真言宗の聖地であった岩殿山を奥院として、さながら高野山の宗教景観を再現したかったのではないでしょうか。

大日如来と謙信。時代の異なるそれぞれの点は、どうやら真言宗そして国分寺というキーワードで結べそうです。謎だらけの平安後期の仏像が、越後古代史はもとより、実は今はない越後府中文化のあり方を考える上でも大きな鍵を握っていることを暗示しています。

中西聰（なかにしさとし）上越市学芸員

■国指定重要文化財
種　別　彫刻
指　定　明治39年4月14日
所有者　国分寺
像　高　117cm

読者から

職場にこられたお客さんが「直江の津」のことを話題にしていたので買いました。

ミニ特集の直江津の路上観察は、知らないところもあるので、春になったら、手に持って実際に歩いてみようと思っています。

私にとって「鰻絵」は存在さえ知らないものでしたし、「古老が語った直江津の昔」も面白く読みました。主人は「関田山脈」を読んで、こんな山だったとは知らなかったと言っていました。これからも楽しみにしています。五智・丸山

☆

市内のホテルで貴誌を読みフロントに聞いて、なおえつ茶屋というところで買いました。話は脇にそれますが、買った店がＴＭＯでやっているというので、店内をよく見るとなかなかのものでした。まちの人の作品を展示したり、雪国らしくコタツが置いてあるのもいい感じでした。少々さびれきった（失礼）町だなという印象を持って帰ろうとしていましたが、多少見方が変わりました。

さて、私の住む茨城県の霞ヶ浦周辺の入り組んだ地形は、鬼怒川が作ったものといわれ、房総半島は縄文時代に二〇メートルも隆起したといわれています。

帰りの車中で「関田山脈」を読みなおして、以上のような感想を持ちました。

品のよい雑誌であることも一言付け加えさせていただきます。茨城県・土浦市

☆

戦後このまちに移り住んで、常々思っていたことが実現したような気がします。なんとなく日々を過ごしているような、ぬるま湯的な市民性を根底から問い直す雑誌が必要だと思っていたので、期待しています。協力できることは協力したいと思っています。仲町・森

☆

上教大の先生がたくさん書いているので、難しいかと思いつつ読んだのですが、どれも易しくわかりやすく書いてあるので、安心しました。これからもあまり難しくならないように願いたいものです。春日山・小池

☆

ちょっと真面目すぎて、いつまで続くのかと思っていたのですが四号まで出ましたね。私は、創刊号の直江津のことをやはり興味深く読みました。港町・佐藤

☆

ショッピングセンターへ行ってこの本を見つけ、それ以来発売を楽しみに購入しています。「見る目」は毎号、興味深々で読んでいます。市民でも容易に見ることのできない「柳図徳利」など、もっと紹介してほしい。新井市・武田

☆

「読書びと」は、田舎の雑誌にしてはかなりのハイクォリティーだと思った。これからも楽しみにしています。西城町・山田

☆

■編集室から■

二年目に入って、少し長い特集を組んでみた。

エドウィン・ダンのインター設立までは、なんとなくわかってきたようだが、インターが蒔いた上越地域の近代工業の種とは何だったのか、ここから先が五里霧中である。エッセイの筆者高橋氏にこの辺も含めての伝記執筆を期待する。

インターおよびダンについての情報、あるいは遺品などがあったらぜひ紹介してほしい。

「こんなのを待っていたんだ」と言いたい紀行文が二つ届いた。これからもいろいろな寄稿をお願いする。

訂正　第四号
16頁図中　侵食→浸食
28頁下段　家裁判事→家裁判事

読者から

夏号の特集の赤羽氏が、海に背を向けていると言っていたのは、心に響いた。中央一

☆

題名が「直江の津」なので、直江津のことばかり書いてあるかと思ったら、いろいろ書いてあるので、面白く読みました。これからも題名にこだわらず、上越全体のこと、たとえばホッサマグナの話のようなものをもっと取り上げてほしいと思います。それから、新しいことをもっと取り上げてください。合併とか環境とか……。南城町二

四号までにいただいたご意見、感想をまとめて掲載しました。これからも感想、ご批判、ご意見をお待ちしています

投稿募集

「直江の津」では投稿をお待ちしています。

本誌の企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、読者の研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが、掲載について、編集部で多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五五(四三)九七一五
FAX〇二五五(四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊「直江の津」春号
第二巻一号　通巻五号
発行日／平成十四年三月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五(四五)〇二〇二
発行者／直江津信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津　―中世都市・越後府中・直江の津―　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ
　水族館になにを見るか　中村幸弘
フリースペース
　石瘦庵主　茶人宗次という人　平丸誠
読書びと　『夢の途上』工藤美代子著
見る目　神饌箱
特別寄稿
　老いるとは　心理学的立場から　高嶋正士

2001年6月　2号　夏号（残部僅少）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ　―直江津の産業史―　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」　―囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町屋の人形さま巡り
知の楽しみ
　妙高山　現在・過去・未来　早津賢二
フリースペース
　茶室見学ノート　石瘦庵　佐藤昭夫
講演
　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治
読書びと　『諫早菖蒲日記』野呂邦暢著
見る目　シンボ凧
インタビュー
　坂詰吉寛さん
私の直江津　世界の果て　杉みき子

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ
　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース
　こんなまちがあった　八木登美男
講演
　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子
読書びと　『画家の妻たち』澤地久枝著
見る目　織部柳図徳利
私の直江津　分岐点　吉越泰雄

2001年12月　4号　冬号
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔
ミニ特集　直江津路上観察。
知の楽しみ　世界一の山脈　関田山脈　南木均
フリースペース
　こんなまちがあった2　八木登美男
読書びと　『宮本常一を歩く』毛利甚八著
見る目　どぶね
私の直江津　安寿恋しや　馬場和明

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋(バックナンバー有)／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館

季刊

直江の津



発行／平成十四年三月二十日■発行所／直江津経済文化研究会■発行者／なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)